

小学生と大学生が異文化交流

●明海大と東京都足立区が「英語村」



児童の日本文化紹介に質問しながら真剣に耳を傾ける留学生



明海大学(千葉県浦安市、安井利一学長)と東京都足立区は11月29日、同大浦安キャンパスで「明海大学あけみ英語村2018」小学生異文化交流プロジェクトを実施した。17年1月に結んだ連携協力協定に基づくもので、区立千寿第八小学校の5年生約80人が、14カ国の留学生約80人や日本人学生約50人と英語で交流した。

双方に多様なメリット

協定では、明海大の教員や留学生が足立区に出向いて区立中学校5校を訪問したり、東京五輪・パラリンピックに向けて区民向けの英会話講座を実施したりしている。工藤信剛区長によると同区の人口増加分のうち3分の2が外国人で、お互いの文化を知る機会をつくるのが急務だという。

朝10時、3台のバスで到着した千寿八小の児童は日本人学生の出迎えを受けた後、体育館で開村式に参加。児童4人に留学生3人・日本人学生1人を基本とした18の小グループに分かれ、自己紹介やゲームなどを通して徐々に仲良くなった。

芝生広場で一緒に昼食を取り、吹奏楽部の歓迎演奏を聴いた後、午後は二つのアクティビティ

で児童側と学生側が次々とグループを替えて交流した。「各国遊び体験」では留学生と共に出身国の伝承遊びを楽しみ、「小学生による日本文化紹介」では児童がアニメのコスプレをしたり、留学生に学童帽やランドセルで小学生役になつてもらったりする工夫を加えたグループもあった。

開村式では記念品を交換し、15時に学生と教職員に手を振られてキャンパスを後にした。

千寿八小は近隣に一般財団法人海外産業人材育成協会(AOTS)の研修センターがあり、約30年前から各学年に外国人との交流活動を組み込んでいる。また近年、区内には続々と私立大学が移転し、学生ボランティアにも恵まれている。しかし「子どもたちにとって大学は身近ではなく、こちらから出向いて雰囲気味わうのはキャリア教育にもなる」(中田真由美校長)。

あけみ英語村は、昨年度(区立西新井小学校が訪問)に続き2回目。区教育委員会の西貝裕武英語教育推進担当課長は「これだけ留学生をそろえるのは大変で、大学には感謝しかない」と喜ぶ。留学生が日本語を話せるのも、英語教育はもとより、国内共通言語としての日本語で異文化交流を体験させる上でメリットだという。

大学側担当の高野敬三副学長は「教員志望の学生も子どもに接することで教職の意味を再確認して深めることができ、ウイン・ウイン(互惠)の関係だと思っている。引き続き来年度も充実させるよう、区と協議していきたい」と話す。

(渡辺教司「教育ジャーナリスト」)